宋元明短篇白話小説に描かれた冤罪

村上公一

序

中国で裁判事件を題材とした戯曲・小説が作られ始めたのは、一体いつからであろう。宋代の白話小説・元代の雑劇には、既にかなりの篇数が現存する。その後も着実に制作され、中国の古典戯曲・白話小説中に占めるこの種の作品――狭義の〝公案〟作品の割合は四分の一以上である。

本稿では、しばらく対象を宋元明の短篇白話小説中の公案作品、中でも冤罪を描いた作品に限定し、その性格を考えていくことにする。何故冤罪を問題にするのかといえば、比較的早い時期に作られた作品と、明中葉以後に作られた作品とでは、明らかに冤罪の描かれ方に相違があり、この相違を明確にしていくことは、公案作品全体の理解の上で、非常に有効な手段だと考えるからである。

注：『三言』（『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』）所収の公案小説について、宋代の作品と明代の作品との比較を試みたものとしては、小野四平『中国近世における短篇白話小説の研究』第二章「短篇白話小説における裁判」がある。

撰述年代については、孫楷第・鄭振鐸・趙景深・譚正璧・嚴敦易・胡士瑩等の説を参考にして推定したが、明初の作品は明らかに明末の作品とその性格を異にしていると思われるので、嘉靖年間に出版された『清平山堂話本』『寶文堂書目』などに見られるものは、全て早期の作品とした。

一

「十五貫戯言成巧禍」（『醒世恒言』巻33）と「惡船家計賺假屍銀　狠僕人誤投眞命狀」（『初刻拍案驚奇』巻11）とは、共に無実の人物が殺人の冤罪を受け、最後に真相が判明し、冤罪が晴らされるという内容だが、早期の作品である前者と後期の作品である後者との間には、大きな距離が認められる。

南宋の時、臨安の劉貴は妻王氏・妾陳氏と三人で暮らしていた。ある日、彼は王氏の実家に行き、商売の元手にと十五貫のお金を貰った。家に帰ると陳氏に「お前を売った金だ」と冗談を言った。陳氏は本気にし、夜逃げした。その夜、劉貴の家に賊がはいり、劉貴を殺して十五貫を持ち去った。一方陳氏は実家に向かったが、その途中で崔寧という若者と出会い、同道していた。二人は追手につかまり、崔寧が生糸を売った代金十五貫を持っていたことから、それが証拠となって二人は冤罪のまま処刑されてしまった。一年後、残された王氏は、実家に帰る途中で盗賊に襲われ、彼の妻にされた。その盗賊の告白から、彼が夫劉貴殺しの真犯人であることを知った王氏は、役所に訴え出た。盗賊は処刑され、事件は解決した。（「十五貫」の要約）

明の成化年間、浙江温州府永嘉県の王杰は、湖州の行商人呂大を殴り気絶させてしまった。王杰は暫くして息を吹き返した呂大に謝罪し、酒食のもてなしをし、絹を送った。呂大は喜んで帰って行った。その夜、船頭周四が呂大の籠と絹を持って訪れ、殴られたのが原因で死んだと告げた。王杰は周四を買収し、下男胡阿虎と一緒に死体を埋めてもらった。一年後、王杰の一人娘が病気になり、胡阿虎に医者を呼びに行かせた。彼は途中で酒を飲んでしまい、医者の家に行かずに戻り、娘は死んだ。王杰は怒り、ひどく叩いた。胡阿虎はそれを恨み、呂大殺害のことを役所に訴えた。王杰は捕えられ、罪を認めた。獄中で病気になった彼は、瀕死の状態に陥った。しかし、呂大が再び永嘉県にやって来て、彼と王杰とのいざこざを知った周四が、彼から籠と絹とを買い、流れてきた水死体を拾い上げ、王杰を騙して脅迫したことが発覚した。王杰は釈放され、周四・胡阿虎は捕えられて刑死した。（「惡船家」の要約）

両者の最も大きな相違は、「十五貫」の崔寧・陳氏が

冤罪のまま処刑されてしまうのに対し、「惡船家」の王杰は、罪を自白し獄中で病気になることによって危機的な状況に至るものの、呂大の登場によって冤罪が晴れ、死を免れている点である。

一体、冤罪を蒙った登場人物が獄中死又は処刑されるのは、早期の作品に於いては頻繁に見られるものの、後期の作品に於いては殆ど稀である。以下の表は、冤罪を描いた作品を列挙したものだが、○は登場人物が冤罪死する作品であることを示す。[注1]

1　早期の作品

○沈小官一鳥害七命（古26）
○宋四公大鬧禁魂張（古35）
○計押番金鰻産禍（警20）
○十五貫戲言成巧禍（醒33）
簡帖僧巧騙皇甫妻（古35）[注2]
陳可常端陽仙花（警7）
陸五漢硬留合色鞋（醒16）
曹伯明錯勘贓記（清）

2　後期の作品

○一文錢小隙造奇冤（醒34）[注3]
○酒下酒趙尼媼迷花　機中機賈秀才報怨（初6）
陳御史巧勘金釵鈿（古2）
金令史美婢酬秀童（警15）
玉堂春落難逢夫（警24）
灌園叟晚逢仙女（醒4）
張廷秀逃生救父（醒20）
李玉英獄中訟冤（醒27）
盧大學詩酒傲王侯（醒29）
惡船家計賺假屍銀　狠僕人誤投員命狀（初11）
東廊僧怠招魔　黑衣盜奸生殺（初36）
硬勘案大儒爭閒氣　甘受刑俠女著芳名（二12）
韓侍郎婢作夫人　顧提控掾居郎署（二15）
甄監生浪呑秘藥　春花女誤洩風情（二18）
許察院感夢擒僧　王氏子因風獲盜（二21）
徐茶酒乘鬧却新人　鄭蕊珠鳴冤完舊案（二25）
兩錯認莫大姐私奔　再成交楊二郎正本（二38）

早期の作品では八篇中四篇、半数に冤罪死が描かれているのに、後期の作品になると十七篇中二篇、八分の一にも満たない。早期の作品では冤罪死が無雑作に描かれているのに対し、後期の作品ではそれを描くことを回避していると言えそうである。これは「惡船家」の成立過程を探ることによって愈々明らかになる。

「惡船家」は「永嘉舟子」（『智囊補』巻27）に基づき、それを改変することによって成立したものである。[注4]

原話の「永嘉舟子」は以下の通り。

湖州小客貨薑於永嘉、富人王生酬直未定、强秤之、客語侵生、生怒拳其背、仆戸限死、生扶救、良久復甦、以酒食謝過、遣之疋絹、還次渡口、舟子問、何處得此、乃道所以、且曰、幾作他鄉鬼矣、時數里閒有流屍、舟子因生心、從客買其絹、并丐筠籃、客既去、即撑屍近生居、脫衫袴衣之、急走叩生門、倉皇告白、午後有湖州客過渡云、爲君家捶擊垂死、浼我告官呼骨肉直其冤、留絹與籃爲證、今已絶矣、生舉家懼、且泣以二百金賄舟子、求瘞屍深林中、後爲黠僕要脅、聞于官、生因徙居忘故瘞處、拷掠病死、而明年薑客具土儀來訪、言買絹之故、其家執僕訴冤、官并捕舟子斃死、（湖州の小客、薑を永嘉に貨す、富人王生、酬直未だ定まらざるに、强いて之を秤らしむ。客の語、生を侵す、生怒りて其の背を拳す。戸に仆れて限死す。生扶け救ふに、やや久しくして復た甦る。酒食を以て過を謝し、之に疋絹を遣る。還りて渡口に次す。舟子問ふ、「何れの處に此を得たる」と。乃ち所以を道ひ、且つ曰く、「幾ど他鄉の鬼と作らんとす」と。時に數里の閒に流屍有り。舟子因りて心を生じ、從容として其の絹を買ひ、并びに筠籃を丐ふ。客既に去る。即ち屍を撑して生の居に近づき、衫袴を脱ぎて之に衣せ、急ぎ走りて生の門を叩き、倉皇として告げて曰く、「午後、湖州の客の渡を過るもの有りて云ふ、『君が家の捶擊の爲に死に垂とす』と。我に、官に告げ、骨肉を呼び、其の冤を直すことを浼す。絹と籃を留めて證と爲す。今已に絶ゆ」と。生、家を舉げて懼れ、且つ泣きて、二百金を以て舟子に賄し、屍を深林中に瘞らんことを求む。後、黠僕の要脅するが爲に官に聞す。生、居を徙すに因りて、故の瘞りし處を忘る。拷掠せられて病死す。而して明年、薑客土儀を具して來訪し、絹を買ふの故を言ふ。其の家、僕を執へて冤を訴ふ。官并びに舟子を捕へ、斃死せしむ）

「永嘉舟子」では、「拷掠病死」とあり、王生は獄中死し、その死後、初めて冤罪が晴れることになっている。「惡船家」でも、王杰は獄中で病気になる。しかし、死の一歩手前までは行くものの、死の前に薑客呂大が再登場し、冤罪死を免れている。ここでは、作品を完成させる過程で、原話に有った冤罪死を削除してしまっている。まさに冤罪死は避けられているのである。

ところで、後期の作品にも僅かながら冤罪死を描いた

ものがあった。しかし、それらの作品に見られる冤罪死は、早期の作品中の冤罪死とは既に異質である。

早期の作品では、「十五貫」の陳氏と崔寧のように、冤罪死するのは極めて普通の善良な人々である。「沈小官」の李吉も善良な一商人で、偶々画眉を買い取ったことから殺人者として処刑される。「宋四公」の馬翰・王遵も極めて普通の官吏でありながら、盗賊の策略によって逆に盗賊として捕えられ、獄中死する。「計押番」の戚青に至っては、勢力が無い為に泣く泣く妻と離婚させられた同情さるべき男でありながら、酒に酔って罵言を吐いたことから、殺人者として処刑される。

一方、後期の作品では、冤罪死するのが善良な人々ではない。「一文錢」の朱常・卜才は次のように説明されている。

爲人奸詭百出、變詐多端、是个好打官司的、（人となりは、色々な悪企みをし、様々に人を詐り瞞す、訴訟好きな男でございます）――朱常

是朱常手下第一出尖的幇手、（朱常の手下で、飛び切りの片腕でございます）――卜才

彼等は、土地争いの相手の策略により、殺人の罪で捕えられ、獄中死する。しかし、彼等は死体を利用して土地争いの相手を脅迫しようとした悪党である。又、「酒下酒」の卜良も同類である。

乃是婺州城裏一個極淫蕩不良進的、看見人家有些顏色的婦女、便思勾搭上場、不上手下休、亦且淫濫之性、不論美惡、都要到到、（婺州の町の甚だ身持ちが悪く碌でなしの男で、よその家に綺麗な女がいるのを見ると、すぐに引っ掛けようと思い、引っ掛けてしまうまで止めないのです。その上、やたらと女を欲しがるたちで、相手の器量が悪かろうが良かろうが、関係なく手を出すのでした）

彼は強姦した女の夫の策略によって、殺人の罪で処刑される。

早期の作品では、善良なる人々――読者・聴衆の感情移入の対象となるであろう人物――の冤罪死が無雑作に描かれているのに対し、後期の作品では、その種のものは皆無になっているのである。

これは、早期の作品では無規則的に描かれていた冤罪が、後期の作品では規則性を持つようになったことを示している。

同様の変化を戯曲でも指摘できる。早期の戯曲では、たとえば元曲では既に同時期の小説と較べて冤罪死を描く割合は極めて少なくなっているが、まだ数篇は存在する。しかし、後期の戯曲、たとえば昆曲などに到ると殆

ど皆無に等しい。

元曲の段階では冤罪死が描かれていたのに、昆曲で削除されてしまった例としては、「竇娥冤」――「金鎖記」を挙げることができる。又、早期の小説から昆曲に改編される過程で冤罪死が削除されたものとしては、「十五貫」――「双熊夢」がある。

注1表中の「古」は『古今小説』、「警」は『警世通言』、「醒」は『醒世恒言』、「清」は『清平山堂話本』、「初」は『初刻拍案驚寄』、「二」は『二刻拍案驚寄』をそれぞれ指す。

又、「汪信之一死救全家」（古39）、「沈小霞相會出師表」（古40）などの謀反の冤罪といった極めて政治的なもの、「金明池呉清逢愛愛」（警30）、「皂角林大王假形」（警36）などの妖怪、鬼等が関与したものは除外した。

注2「簡帖僧」は『清平山堂話本』にも「簡帖和尚」として収められている。

注3「一文錢」は、鄭振鐸は元・明間の作としており、内容から見ても早期の作品である可能性が強いが、確証が無いため、ここでは一応後期の作品とした。

注4『夷堅志補』巻5「湖州薑客」も「永嘉舟子」と同内容だが、『智囊補』に取材したものは『初刻』に集中し、『夷堅志』は『二刻』に集中していること、更に「惡船家」の入話が『智囊補』巻27「鄒老人」と同じ話であることから、凌濛初が直接取材したのは「永嘉舟子」であったと予想される。ちなみに「湖州薑客」では王生が逮捕されて死ぬ部分を「下獄、不勝拷掠、以病死」としている。

二

では、冤罪死を回避することのない早期の作品では、冤罪死が作品中でどのように消化されているのか。先に示した「十五貫」の分析を通して、この問題を考えてみよう。

「十五貫」の筋は、殆ど偶然性によって支配されている。劉貴の陳氏に対する冗談、陳氏の夜逃げした日に強盗が襲ったこと。陳氏と崔寧との出会い、崔寧が十五貫持っていたこと、王氏と劉貴殺しの真犯人との出会いなど、偶然による筋の展開は数え切れない。これは物語としては常なることで、さほど異とするに当らないが、注意すべき点は、語り口もまたその偶然性を強調するようになっていることである。一例を挙げれば、強盗が襲う場面は次のように描写されている。

不想却有一個做不是的、日間賭輸了錢、没處出豁、

夜間出來掏摸些東西、却好到劉官人門首、因是小娘子出去了、門兒拽上不關、那賊略推一推、豁地開了、

（思わずも、ここに一人のならず者がおり、昼間ばくちに負けて、金の遣り繰りがつかなくなったので、夜中に出て来て盗みを働こうと、丁度劉旦那の門口までやって来ました。陳氏が出ていったので、門は閉じてあるだけで門が掛けてありません。この盗人がちょっと押すと、ぱっと開いてしまいました）

陳氏が出て行き、劉貴も一度目を醒したが又眠ってしまった後、強盗が通りかかる。「不想・・・。」「却好・・・」「因是・・・」「豁地開了」この展開は、巧みに偶然性を強調している。

更に、強盗が劉貴を殺す場合も同様である。劉貴は強盗に気付き、近所の人々に助けを求めようとする。まさに強盗にとっては危機的状況である。

那人急了、正好没出豁、却見明晃晃一把劈柴斧頭、正在手邊、（その男は苛立ち、まさにどうしようもない所であったが、何と、キラリと光る一本の柴斧が丁度手元にあるのが目に入りました）

ここでも「正好」「却見」「正在」の連用が、偶然性を強調する働きをしている。

この他にも、陳氏と崔寧の出会い、崔寧が十五貫の金を持っていることが判明する場面なども同様である。

小娘子清早出了鄰舎人家、挨上路去、行不一二里、早是脚疼走不動、坐在路傍、却見一個後生・・・・一直走上前來、（陳氏は朝早く隣の家を出て、実家に向かって歩き始めましたが、一・二里も行かないうちに、もう足が痛くなり、路傍にしゃがんでいました。すると、丁度一人の若者が・・・真直ぐこちらにやって来るのが目に入りました）

搜索他搭膊中、恰好是十五貫、一文也不多、一文也不少、（崔寧の袋の中を搜しますと、これがきっかり十五貫の金。一文も多くなければ、一文も欠けていない）

二人が冤罪で処刑されたことが語られる場面でも、作者は次のような解説をする。

這段冤枉、仔細可以推詳出來、誰想問官糊塗、只圖了事、不想捶楚之下、何求不得、（これが無実の罪だということは、よく考えれば分ることです、ところが、なんと役人がぼんくらで、事を片付けようとばかり思い、拷問すれば何だって思いのままになるということに気が付かなかったのです）

偶然にも裁判官が無能であったが為に、二人は無実の

罪で死んでいったのだと言う。

更に、事件を解決に導く王氏と盗賊との出会いを語る時にも、偶然性の強調が見られる。本来なら三年の喪に服すべきところを、父親の命令で、仕方なく一年で切り上げて家に帰ることになる。

一路出城、正値秋天、一陣烏風猛雨、只得落路、往一所林子去躲、不想走錯了路、（町を出ると、折りしも秋のことで、空掻き曇り、風が出たかと思うと、烈しい俄か雨、仕方がないので街道からそれて、ある林の中に隠れたところが、思わずも路に迷ってしまいました）

路に迷ってうろうろしている時、突然盗賊に声をかけられる。

次から次へと重なり合う偶然の連続、その偶然性があまりにも強調された場合、読者―聴衆は逆に一つの必然として意識するのではないだろうか。作者は、これら全ての出来事をまとめる形でこう言っている。

這回書、單説一個官人、只因酒後一時戯笑之言、遂至殺身破家、陷了幾條性命、（今回のお話は、ある旦那が、酒後のちょっとした冗談がもとで遂には殺され家を滅ぼし、幾人もの生命を失わせてしまったというものです）

入話にあるこの言葉は、全ての悲劇を「ちょっとした冗談」に起因するものとして位置づける。この発端の何と些細なことか。以下の悲劇と較べて余りにも落差が大き過ぎるではないか。読者―聴衆は、この発端によって直接以下の事件が因果づけられるとは思わないであろう。彼等が偶然の連続を必然と感じる時、そこに、人智を越えた所で人間の運命を左右する何物かの存在を意識していたに違いない。陳氏・崔寧の冤罪死もこの運命の一齣に過ぎないのである。

冤罪死を描いた他の作品でも同様である。「計押番」では、計安が金鰻を捕えたことから幾人もが非業の死を遂げる。

汝若害我、教你合家口死於非命、（お前がもし俺を殺したりしたら、お前の一家全部に非業の死を遂げさせてやるぞ）

金鰻のこの言葉が全篇を覆い、やはり人智を越えた所―金鰻の怨み―によって、人間の運命が決定されている。戚青の冤罪死はその一部分に過ぎない。

「沈小官」でも、一羽の画眉のために、何人もが死んでいく。

你道只因這個畫眉、生生的害了幾條生命、（ただこの画眉のために、むざむざ何人かの生命を奪うこと

になったと申します）

一羽の小鳥の存在が、七人もの生命を奪った原因だとする。「十五貫」の「ちょっとした冗談」同様、非常に些細な発端である。更に、冤罪死する李吉が、沈小官を殺して画眉を奪った張公と出会う場面はこう描かれる。

當時張公一頭走、一頭心裏想道、我見湖州墅裏客店内、有個客人、時常要買蟲蟻、何不將賣與他、一逕望武林門外來、也是前生注定的刼數、却好見三個客人、兩個後生跟着、共是五人、正要収拾貨物回去、却從門外進來、（この時張公が歩きながら考えるには、湖州墅の宿屋によく小動物を買う商人がいるから、あそこへ行ってその男に売りつけない手はないと。そこで、真直ぐ武林門の外へとやってまいります。これもまた前世からの運命でございましょう、丁度三人の商人が、そこに手代二人が随い、総勢五人で、今まさに荷物をまとめて帰ろうと、門の外からやって来るのが目に入りました。）

張公が画眉の買い手を捜しに行く時、画眉好きな李吉とばったり出会う。ここでも「却好」「正要」「却」など、意外性を示す文字が頻繁に使われていて、偶然であることの強調がなされている。しかし、同時に「也是前世注定的刼數」という言葉が挿入されている。一見偶然に見える全ての事件が、実は人智を越えた所で按排されている必然であることを印象づけようとしていることは明らかである。

早期の作品では、以上見てきたように、回避しない冤罪死を、人智を越えた所で決められている運命の一齣――これは現実には偶然の連続のように見えるのだが――として描いている。そこでは、冤罪死というものが特別な事象であるわけではない。他の死と全く同列に描かれている。

裁判官の過失による悲劇が他の悲劇と未分化の状態で、全てが運命として描かれていることは、早期の作品に於いては、裁判そして冤罪が、まだ対象として明確に意識されてないことを示している。

又、これらの作品が歓迎されたということは、当時の読者・聴衆にとって、裁判とは自分達の世界を越えた所にある、それに対して主体的に参与することが出来ず、但だ受動的にその決定を受け入れるだけの存在であったのではなかろうか。

更に、登場人物が、読者・聴衆の姿の投影であるとするならば、早期の作品では裁判を利用する人物が極めて少なく、その上、その裁判を利用する人物が悪人として描かれている人物に限られ、善良なる人々は常に裁判に

翻弄される存在であるという点も、右の推測を裏付ける。

注：「宋四公」では、宋四公等は必ずしも悪逆非道な人物として描かれていない。却って義賊的色彩を帯びている。しかし、彼等が、聴衆にとって自分達と同類の普通の人間として意識されたとは考え難い。この点で、後期の作品に登場するような、裁判を利用する〝善良な人々〟とは相違がある。

又、裁判に対して、比較的積極的な行動を起こす〝善良な人物〟が登場する作品は早期では二作品ある。「沈小官」では、冤罪死する李吉の友人二人は、李吉の冤罪を晴らすべく行動をとる。「陸五漢」では、冤罪に陥った張盡自身が自身の冤罪を晴らすべく画策する。この二篇のうち、前者では冤罪死が描かれ、後者では冤罪死が描かれていない。両者とも、明初の頃に作られたものと推定されるが、他の早期の作品とは既に異なる点が見られる。早期から後期への過渡的状態を示していると思われる。

三

後期の作品になると冤罪死を回避するようになるが、早期の作品と後期の作品とでは、冤罪を描く時、既にその発想を異にしていると思われる。先に示した「悪船家」の分析を通して、この点を考えてみよう。

「悪船家」は「永嘉舟子」に基づいたものだが、作品化する過程で、冤罪死を削除しただけでなく、その構成を大きく改めていることは注目に値する。

「永嘉舟子」では始めから、王生が冤罪であることが示されている。

還次渡口、舟子問、何處得此、乃道所以、且曰、幾作他鄉鬼矣、時數里間有流屍、舟子因生心、從客買其絹、并丐筠籃、

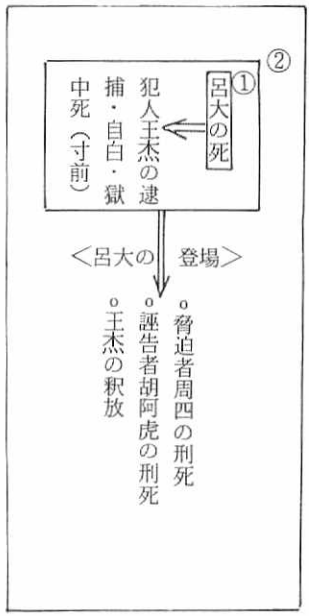
この後で、舟子が王生の屋敷に行く場面が書かれている。それに対し、「悪船家」では呂大の再登場まで真相は伏せられている。

呂大再登場以前の王杰はあくまでも殺人犯人として描かれている。善良な人間を殴り殺し、うまく死体を処理したものの、下僕の訴えによって殺人事件が発覚し、捕えられて罪を自白する。そして獄中で病死寸前になる。ここで、一つの裁判事件がほぼ結末を迎えている。

そこで、呂大が再登場し、初めて王杰の冤罪が明らかになり、物語の眼目は、王杰の冤罪が完全に晴れ、周四の脅迫、下僕の誣告が裁かれることに転化する。そして、

王杰が釈放され、二人が打ち殺されることによって、全体としての裁判事件が解決する。物語全体が二重構造になっているのである。

図式化すれば次のようになる。



誰もが一件落着かと信じた①の事件が、突如として②の事件に転化する。そのきっかけである呂大の登場は読者の意表を衝く。

早期の作品で冤罪が描かれる時は、必ず始めから冤罪であることが示されている。冤罪であることが後半まで明示されない「陳可常」は唯一の例外だが、これとて冤罪らしきことは始めから読者に臭わせている。物語は、数奇な運命に弄ばれる人々に同情を寄せながら、最後には冤罪が晴れることを目指して進展していく。

それに対し、この「悪船家」では感情の高まりは殆ど期待されていない。①の時点から既に王杰への同情、胡阿虎への怒りを持つ可能性が有ったとしても、王杰が呂大殺害の犯人であるという①での現実が、それを押えてしまうであろう。又、殺された呂大に同情し、王杰が罪を受けることに一種の痛快さを感じることが有ったとしても、②に到り、その感情は粉砕されてしまう。読者は感情を媒介として、物語の進行に没頭していったのではあるまい。彼等を引き寄せたのは、意表を衝いた物語の展開によって生じさせられる知的な眩暈であったろう。作者が「悪船家」に二重構造を持たせたのは、読者にこの知的眩暈を与えるためであったと考えざるを得ない。

「悪船家」ではこのように構成を意図的に改変しているが、同時に描写もそれに見合ったものになっていることに気が付く。

勞苦憂愁、染成大病、劉氏求醫送藥、百般無効、看看待死、（苦しみ憂えて重病にかかってしまいました。劉氏は医者を頼んだり薬を送ったりしましたが、何をやっても効き目は無く、ただ死を待つのみとなりました）

王杰の獄中での状態はこのように描写される。そして、自分の死期を悟った王杰は妻劉氏を獄中に呼び寄せ、別れを告げる。劉氏は家に帰り、悲しみに打ちひしがれて

いる。その時、

僮僕們自在廳前鬪牌耍子、只見一個半老的人、挑了兩個盒子、竟進王家來、放下匾擔、封家僮問道、相公在家麼・・・・、那些家僮見了那人、仔細看了一看、大叫道、有鬼、有鬼、東逃西竄、你道那人是誰、正是一年前來賣薑的湖州呂商人、（下男たちは庭先でかるた遊びに興じていましたが、ふと見ると、一人の中老の男が籠を二つかついで、王家の屋敷の中に入って来て、天秤棒を下すと、下男に向かってたずねました。「旦那さまはいらっしゃいますか」・・・・・・・・・・下男たちはその人を見ると、つくづく眺めていましたが、やがて大声で「幽霊だ、幽霊だ」と叫び、散り散りに逃げ出しました。一体この人は誰だったのかと言いますと、これこそ一年前に生姜を売りにまいりました湖州の呂商人でございます）

遊び興じている下男たちの前にふらっとやって来た男、皆の視線がそこに集まり暫しの沈黙、そして「幽霊だ」という叫び声が起こる。この呂大の登場は、非常に効果的に描かれている。まさに構成の上で最も重要な場面で、その構成に合った、充実した描写がなされているのである。[注1]

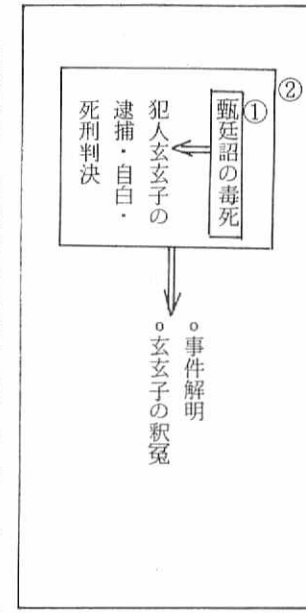
「甄監生」についても同様の指摘が出来る。

明の時、山東曹州の国子監監生甄廷詔は錬丹術に凝り、家産を注ぎ込んだ。同郷の人々に注意されたが聴き入れず、今度は家を売り、内丹作りのために下女四人を買った。そして、彼を訪れた玄玄子という方士から教えを受けていた。或る日、玄玄子は十数粒の房中薬を廷詔に与え、その夜は同室に眠った。翌朝、廷詔が別の小部屋で口から血を流して死んでいるのが発見された。廷詔の息子希賢は、玄玄子が金目当てで父を殺したと役所に訴えた。玄玄子は自白し、死刑の判決を受けた。しかし、事実は、その夜部屋を抜け出し、下女春花と密会中に例の房中薬を誤用したために死んだのであった。春花は廷詔の死後、同里の李宗仁に嫁いだ。春花は事件の真相を聞いた宗仁に嫌われ、更に姑からは罵られ、遂には自殺した。その後、名裁判官許進が巡按として到り、廷詔の事件を不審に思い調べ直す。宗仁から春花の告白を聞き出し、事件は解明された。玄玄子は、医者の過失致死として杖百の罰となり、死罪を免れた。

（「甄監生」の要約）

この作品でも、玄玄子が冤罪であることは完全に隠されている。そして、甄廷詔毒殺事件は玄玄子死刑判決で

終結してしまう。その後で真相を提示し、今度は玄玄子の釈冤が如何にしてなされるかに焦点が移る。



「悪船家」と同様の図式化が可能である。これもまた二重構造を持っている。しかも、①の結着感は「悪船家」以上である。

鄉里人聞知的、多説、甄監生尊信方士、却被方士藥死了、雖是甄監生迷而不悟、自取其禍、那些方士這樣没天理的、今官府明白、將來抵罪、這才爲現報了、親戚朋友没个不歡喜的、至于甄家家人、平日多是恨這些方士入骨的、今見家主如此死了、恨不登時咬他一塊肉、斷送得他在監裏問罪、人人稱快、（このことを聞いた同郷の人々は、口々にこう言うのでした。「甄監生は方士を敬い信じて、却って方士に殺されおった。甄監生は迷いから醒めずに、自ら禍いを招いて、自業自得というものだが、それに引き替え、あの方士ってやつは悪逆非道なことをしやがって。そいつも、今お役人がはっきりさせ、取っ捕まえてちゃんと罪を科された、これでやっと報いを受けるというもんだ」と。親戚や友人たちは一人として喜ばないものはおりません。まして、甄家の人々は、常日頃からこいつら方士に対する恨みが骨髄に徹しているというのが殆どでしたから、主人があんなふうに殺されたのを見て、すぐにでもあいつの肉を咬み切ってやれないのが歯痒い程でしたが、役所に突き出して、牢獄で死刑の判決を受けさせたものですから、皆快哉を叫んだのでした）

玄玄子の死刑判決を聞いた人々の喜びをこのように描き出している。①の結着感を強調すること甚しい。読者はここで全て事件は解決されたと思い込むだろう。しかし、この結末から、突然甄廷詔の死の真相が提示され、玄玄子の冤罪が初めてわかり、②の事件に転化する。裁判結果に満足する人々の姿を描くことは①から②への落差を増大させる効果がある。ここでも構成に合致した描写がなされている。[注2]

この二篇には、作者によって冤罪が意図的に利用されている図を見ることが出来る。早期の作品では、回避す

ることなく、それを運命の一齣として描くしかなかった冤罪死を、後期の作品では、回避するのみではなく、冤罪を利用すらしているのである。

作者が、作品を作り上げる過程で、冤罪を十分に意識し、更にはそれを巧みに利用した構成を持たせることは、作者自身が既に現実社会の中で、実際の冤罪―裁判を客観視できるようになっていなければ不可能であろう。

同時に、これらの作品が、読者に歓迎されたということは、当時の読者にとっても既に裁判というものが人智を越えた不可思議な存在ではなく、身近な、少なくとも自分達と同一の世界に存在するものとして意識されていたに違いない。

一方、作品中の登場人物にも、早期の作品では存在しなかった、冤罪を利用する〝善良なる人々〟がいる。「酒下酒」は後期の作品には珍しく冤罪死が描かれた作品だが、それだけでなく、裁判（冤罪）を利用する主人公が善良な人物として描かれている点が興味深い。

婺州の賈秀才の妻巫氏は、夫の留守中、土地のならず者卜良に、その美貌を目にとめられた。卜良は観音庵の趙尼に手引きを頼んだ。趙尼は子授けの白衣観音なるものを餌に巫氏を観音庵に呼び、酒の浸み込んだ餻を食べさせることによって酔っぱらわせ、卜良に姦させた。不思議な夢を見た賈秀才は家に帰り、巫氏から事件を打ち明けられると、夢の中での観音のお告げと一致する方法で、卜良たちに復讐することにした。巫氏は卜良を呼び、彼の舌を噛み切った。賈秀才はそれを持って観音庵に行き、趙尼と弟子の本空を殺し、本空の口の中に卜良の舌を入れて帰った。殺人の報告を受けた知事は、舌を噛み切られた者を犯人として探させた。卜良は捕えられ、申し開きも出来ぬまま打ち殺された。

ここに描かれている賈秀才は、裁判を利用することによって、妻を汚した男に復讐する。彼は殺人を犯し、人を冤罪で殺しながら、何の罪も受けず、かえってその行為、特にその行為を起こさせた知恵を賞讃されている。ここで注意したいのは、賈秀才が利用したのが不正な裁判だったことである。

卜良の舌を若い尼の口の中に入れて帰ると、次のように言う

自有人殺他、（おのずと他人があいつを殺してくれよう）

卜良が殺人犯として殺されることを期待しているのは明らかである。始めから不正な裁判を予想し、卜良が犯人とされる状況を作り上げる。そして、裁判官が期待通

りの働きをしてくれるのをじっと待っているのである。賈秀才が期待していたのは、真相まで解明してしまう公正な裁判ではなく、自分の作り上げた証拠によって卜良が冤罪を受ける、不正な裁判だったのである。不正な裁判の存在をある意味で容認し、逆にそれを利用する人間として賈秀才は描かれる。

これも、当時の読者の姿を反映していると考えるべきだろう。彼等はもう裁判に関して無知ではない。裁判の行われ方、それに対する対処の仕方もちゃんと知っている人々であった。それは、これらの作品の読者と殆ど同時代、同階層相手に出版されたと思われる日用類書類に訴状の書き方の説明までされていることからもわかる。[注3]

注1 一の注4で、凌濛初が直接取材したのは「永嘉舟子」であろうと推定したが、呂大の再登場を、「湖州薑客」では「薑客又至訪、家以爲鬼也」と描いていることから、「惡船家」のこの部分で呂大を下僕達が「鬼」と見做す点は、「湖州薑客」を参考にした可能性が残る。元来「永嘉舟子」は「湖州薑客」の記事を删略したものであるから、両者の構成は同じである。

注2 「甄監生」では、名裁判官許進の登場を待って冤罪が晴らされるが、その描写も早期の作品には見られないものである。ここでは許進の訊問部分が非常に細かく書き記され、その字数は千字を越える。これも、本文中に挙げた構成の改変同様、知的興味に焦点を合わせた作為であろう。

注3 『三台萬用正宗』・『折獄明珠』・『三台明律正宗』・『法家須知』・『法家秘授智囊書』などがある。更に、『三台萬用正宗』『三台明律正宗』と同じ出版元（余氏雙峰堂）から、『三言・二拍』と重複する内容を持った公案小説を幾篇も収録する公案小説集『皇明諸司廉明奇判公案傳』が出版されていることからも、当時の読者が、裁判に関する知識を持っていたことは疑いない。

結び

以上、早期の作品と後期の作品に於ける冤罪の描かれ方の相違を見てきたが、早期の作品では、冤罪死を回避することなく、それを一つの運命として描き出す。その登場人物は裁判に弄ばれ、悲劇の淵に沈んでいく。

それに対し、後期の作品では、冤罪死を回避している。更には、冤罪であることを後半まで読者に隠し、読者を知的眩暈に誘い込むような作品まで出現する。登場人物

でも、積極的に裁判を利用し、仇を冤罪死させる人物が高い評価を受けて登場する。

これらの相違を一言でまとめるならば、冤罪（裁判）に対する消極性と積極性・受身性と能動性という言葉に要約できよう。これは、現実社会の中での、読者・聴衆、更には作者の裁判に対する意識の反映でもあろう。

本稿では、対象を短篇白話小説に限定したため、冤罪死が何故後期の作品になると回避されるようになるのか、詳しく触れることが出来なかった。私は、冤罪死を回避するようになったのは戯曲に始まり（元代雑劇では既に回避が始まりつつある）、それは、裁判事件を題材とした作品が決まった筋を持つようになるのと密接な関係にあると考える。更に、後期の作品（小説）に於ける冤罪死の回避は、戯曲からの影響として捉えるべきではないかと考えるため、敢えてこの点には触れず、今後の問題とした。その為、内容が稀薄になってしまったのは否めないが、早期の作品・後期の作品に於ける冤罪の処理方法の相違の大枠は捉えられたと思う。